

# ミサイル発射に対する過剰反応と オスプレイの低空飛行の恐怖

清末愛砂

一〇月四日の朝七時半頃、手にしていた携帯電話から突然Jアラート（全国瞬時警報システム）が鳴った。胆振東部地震の経験から、「また大きな地震が来るのでは」と一瞬身構えたが違った。朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）による弾道ミサイル発射に対する警報だった。正直、その瞬間に気が抜けた。「頑丈な建物や地下に避難」と言われても、移動し終わったときには、ミサイル自体が日本の「上空」を通過した後としか思えない。上空通過（日本の上空通過の場合にJアラートが発信される）といっても、弾道ミサイルは発射後に一度大気圏を抜け、弧を描くように飛び、再び大気圏に入る。したがって、大気圏を超えている間は日本の領空への侵犯にもあたらない。さらに、落下地点も日本の排他的経済水域（EEZ）の外だ。

Jアラート発信以後、ニュース番組はしばらく北朝鮮のミサイル発射問題で埋め尽くされた。あたかも領空侵犯が起きたかのような騒ぎぶりだった。落下地点から考えてみても、それが日本を狙っていないことが明確であったにもかかわらず、「怖かったです」とコメ

ントする人々の声ばかりが流されていく。東アジア情勢からすると、米韓共同訓練を意識しての発射であるのに、狙われてもいない日本が過剰反応しているのだ。あるいは、他の政治目的のために、意図的な過剰反応をしていると見ることもできるだろう。

筆者は「恐怖」を感じた人々の気持ちを否定しようとは思わない。何に対して恐怖心を抱くかは、人によって異なるからだ。また、Jアラート自体を否定しようとも思わない。とりわけ大規模な自然災害がある日本のように、自然災害発生時に危険を瞬時に伝えるしくみは必要だからだ。問題は、科学的かつ論理的に考えれば危険性が極めて低い（いかなる出来事でも危険性を完全に払しょくすることは困難）ときに、政府やメディアが過剰反応し、恐怖心を煽ることで、人々の気持ちを一定の方向に持つていくことにある。

同時期にあたる一〇月一日から一四日までの二週間にわたり、北海道各地では陸上自衛隊と米海兵隊による実動訓練（レゾリュート・ドラゴン22）が実施された。丘珠駐屯地内の

民間共有の飛行場（丘珠空港）を拠点にし、それを含む道内五か所の自衛隊関連施設で行われたが、その際に、米軍の普天間基地と横田基地に所属する輸送機オスプレイも用いられた。この訓練は、三か所の演習場を南西諸島に見立ててのものであり、近年、急速に押し進められてきた同諸島の自衛隊の配備と連動している。また、自衛隊が道外（特に南西諸島）で活躍できるようにするために、北海道等での演習の促進を盛り込んだ二〇一八年策定の防衛大綱（岸田政権は今年一二月に同大綱の改定をめざしている）に基づくものである。

レゾリュート・ドラゴン22の実施中、筆者の友人・知人は矢白別演習場内の民有地や然別等で監視活動を行ったが、「オスプレイが轟音をとどろかせながら、低空飛行していたのが怖かった」とその恐怖心を語る者が多かった。日高に住む小学校教員は、「生徒が学校にいる平日に、勤務校の上をオスプレイが低空飛行していった」と教えてくれた。こうした話を聞くと、北朝鮮の弾道ミサイル発射に比べると、オスプレイの低空飛行は墜落の可能性を含め、はるかに大きな危険性をともなうものだと見える。しかし、政府は目にはつきりと見える形で飛んでいくオスプレイの危険性については、口を閉ざして問題視しない。この見事なまでの対比がミサイル発射の政治利用を物語っているのではないだろうか。

へきよすえ あいさ・室蘭工業大学大学院工学研究科教授